

「歴史地理学の本質と方法」については、すでに前回の、歴史地理学会創立二〇周年記念の特集号紀要において論ぜられたところであるが、歴史地理学の研究の基本的資料としては、云うまでもなく、古文獻や古記録などの史料や地名の採録、さらに先史地理学では遺物や遺跡も重要な研究資料である。しかしこれらとならんで、いま一つ重要なのは古地図類である。

それは、たとえ稚拙、素朴な絵図のようなものであっても、地図が地表の一部を縮小して平面に描き表わしたものである以上、それがつくられた当時の、ある一定の地域における事物の分布や配列の状態を、これを通してうかがうことができるからである。

しかもわが国では、奈良時代の東大寺開田図をはじめ、中世にはいくつかの莊園図などがさいわいにも現存しているばかりでなく、江戸時代には、幕府によって、慶長・正保・元祿・天保と四回にわたって国絵図が調達され、各藩では詳細な城下町図や村絵図が多数作成された。また浮世絵の発達にともなう木版印刷術の進歩によって、江戸・大阪・京都の三都をはじめ、全国の主要な都市の町図や道中図など、さまざまな地図が民間でも刊行され、多彩な地図文化が栄えた点において、わが国はオランダやイギリスなどの諸国とくらべても劣らぬほどである。

したがって、これまでも条里制や城下町などの歴史地理学的研究に古地図が多く利用されてきたが、「地図と歴史地理」と題する本紀要に寄稿された方々の論文によって、今後の歴史地理学に対して、さらに新しい分野や研究方法が開かれたものと思われる。

一九七九年一月

織田武雄